

兎の糞

うさぎのふん

山全体が別荘地のなかの小道は、私有地であることもあってか、整備と放置のなかほどの状態にあった。道は落ち葉が堆積してふかふかで気持ちいい。腐葉土のかび臭さもきもちいいものだ。森の陰にみえる別荘はまだ目を覚ましていない。

ここは日本でも指折りの避暑地だ。外国人宣教師によって目をつけられたこの土地は、いまでは観光地としても名を売り、シーズンちゅうの表通りはひどい混雑である。

しかし、ここは文六のように別荘ライフを楽しみにくる日常をもたない人間にとっては

「不便」な土地である。別荘族は、日常生活で「おさんどん」などしないから、ここへきて嬉々としておさんどんをし、非日常を楽しんでいるのであろう。おまけにここは空気は澄んでいるが、意外に湿気の多い土地柄である。放っておくと家じゅうがカビだらけになる。

歩き始めてほどなく、その存在には気がついていただけだが、文六は確信がもてなかった。それになんでそんなものが葉の上にあるのか理解に苦しんでいた。

鳥が落とした糞だろうかと思ったが、それにしても数はおおすぎ。しかも正確にひとつの葉にひとつなのだ。まるで気の長い暇人がひとつひとつ葉のまんなかにも置いたようにも思える。

ついに文六はがまんできなくなって、それに近づきしげしげとみ

つめ、ついで、指でそっとつついてみた。

それは葉にしっかりとくっついていて、葉から生えていた。しかし、どうみても兎の糞である。この葉はなにかの病気に罹っているのか、と思って気味が悪くなり、つついた指をジーパンにこすりつけた。

湿っぽい森を抜け、霧の頂上を攻め、反対側の斜面に立ち並ぶ別荘を品定めしながら家に帰った。数日後さらに新幹線で東京に帰り、勤め先の書棚にあった野草の本を開いた。

そいつの正体がようやくわかった。和名で「はないかだ（花筏）」という草花だった。本によれば、分布地は北海道から沖縄までとひろく、山地の林内に普通に生えるという。若葉は食用になるとある。

こいつは葉の上に花を咲かせるらしい。そしてそのまま葉の上に実

「兎の糞」を残す。花の時期はとうにすぎていたので、兎の糞に遭遇したわけだ。「雌雄異株で実をつけないものもおおい」というから、兎の糞に出会ったのはラッキーなのだ。

しかし、花筏とはずいぶんと風流な名前だ。

一年後、花筏に会いに行った。去年はあんなに目についたものが今年はどういうわけか見あたらない。ようやく一株だけみつけた。

風流な名前が知れ、その気になって眺めると気持ち悪さはすっかり消えて、魅力的に見えてくるから、我ながら単細胞だと文六は思う。緑の葉に乗るその実は、まるで緑の絨毯に乗って空を飛ぶ人のようにみえてくる。つい調子に乗って一句ひねりたくなる。

里山の緑の海にはないかだ

いつか、花の時期にであってみたいものだ。

